

小松成美

保土ヶ谷区制90周年に寄せて



保土ヶ谷区区制、90周年おめでとう
ございます。私は保土ヶ谷区に生まれ、
この地で成長しました。今も保土ヶ谷
区民です。区制90周年に際し、寄稿の
機会を得ましたので、ここに保土ヶ谷
区への思いを綴りたいと思います。

私が生まれたのは天王町の産院でし
た。昭和30年代半ばを過ぎたばかりの
頃、保土ヶ谷区には長閑な田園風景が
広がっていました。子供時代の私は健
康で好奇心に満ち、本を読んでいるか、
外を駆け巡っていました。とりわけ野
山は最高の遊び場で、キャベツや菜の花
の畑でモンシロチョウを追い掛け、田ん
ぼでメダカやオタマジャクシを獲り、近
くの里山で鳥の観察をしたり植物採取
をしたりしたものです。商店街はまだ

小さなもので、食料品や衣料品の品数・
品揃えは今とはほど遠いものでした。
私が着ていた洋服はほとんどが母の手
作りでしたが、それもいつも泥だらけで、
新しく買った全自動の洗濯機が日々、
音を上げて回っていました。

1970年代の高度成長期にさしか
かると、豊かさの足音は一気に大きくな
り、街は急速に変化を遂げていったので
す。JRや相鉄線沿線を中心に開発が進
み、商業地・住宅地としての賑わいを見
せていきました。山が切り開かれ大きな
団地や新興住宅地に美しい街並みが誕
生していくと、街にはたくさんの子供た
ちとその家族の音が響きました。
私が、小学校時代に熱中したのはス
ポーツ観戦です。広大な保土ヶ谷区はス

ポーツの施設に恵まれていました。県立
保土ヶ谷公園には、高校野球で甲子園
予選が行われる保土ヶ谷球場を始め、
ラグビー場、サッカー場、テニスコート、
体育館などがあます。特に高校野球の
神奈川県予選は、春も夏も私にとつての
一大イベントでした。ブラスバンドの演奏

が鳴り響く満員の保土ヶ谷球場で繰り
上げられる硬式野球のゲーム。投球の一
球、打者のフルスイング、走者のヘッド
スライディングに胸を高鳴らせ、歓声を
上げました。保土ヶ谷球場でのゲーム観
戦は高校生になっても続きました。
近年、阪神甲子園球場で行われる全
国大会を観戦した時に思い知ったこと
があります。それは神奈川県予選が特
別である、ということ。あれほど

の熱狂を巻き起こしている県予選会場
は他にはないと思います。後にスポー
ツノンフィクションを執筆する私の原点
は、まさにこの保土ヶ谷球場にありま
した。子供の頃に見た高校球児は、私
にとつて憧れであり、彼らの真摯なプ
レーと躍動がアスリートへの尊敬の出発
点でした。また保土ヶ谷区に隣接する

神奈川区の三ツ沢球技場（現ニッパツ
三ツ沢球技場）へは自転車漕ぎ、日
本サッカーリーグ（JSL）の観戦を
しました。古河電気工業サッカー部、
日産自動車サッカー部、全日空横浜サッ
カークラブなどが試合を開催していた
当時、後のプロリーグ（Jリーグ）が
設立されることなど、まだ想像もでき
ませんでした。



スポーツへの愛情とともに私の心を驚掴みにしたのは、保土ヶ谷区の歴史です。小学生の頃から歴史が大好きだった私は、教科書で「東海道五十三次・保土ヶ谷宿」を知り、中学生になると区内の史跡巡りをはじめました。図書館でコピーした古地図、また永谷園のお茶漬けのおまけに付いていた歌川広重の小さな浮世絵を手に、我が家から程近い保土ヶ谷宿の本陣や脇本陣、茶屋本陣の場所あたりを歩いたのです。本陣跡や天王町の帷子川橋跡、権太坂など、それぞれの場所に当時の面影があり、將軍や参勤交代の列、商人や町人たちなど、江戸時代に行き交った人々に思いを重ねることが大好きでした。

作家になってから特別な興味をそえられる保土ヶ谷区歴史上の人物は、苧部清兵衛です。1601年(慶長6年)、徳川家康より、保土ヶ谷宿の本陣・名主・問屋の三役を任された初代・苧部清兵衛ですが、その名は当主に受け継がれ、1870年(明治3年)に本陣が廃止となるまでの約270年11代にわたって「苧部清兵衛」が名乗られま

菜を栽培している苧部博之さんです。この直売所では畑で採れた新鮮な旬野菜を一年中手にすることができ、私はいつもその恩恵を受けています。苧部さんの名を全国区にしたのはオリジナル野菜の「苧部大根」です。東北地方の赤家地大根に他の種類を掛け合わせて改良を重ねたもので、紫、赤、ピンク、白の美しいグラデーションを見せる大根は、瑞々しく甘みがあり、有名レストランのシェフたちがごぞつて仕入れにやつて来ます。保土ヶ谷区で育まれた野菜を目にし、食する度に「横浜という大都会でよく育つたものだ」と感心します。そして同時に、大地の豊かさ、21世紀になっても代々の土地で農業が続いていけるということ、それこそが保土ヶ谷区の誇りなのだと思います。

数年後には、西谷を始発とする神奈川東部方面線(相鉄・JR直通線、相鉄・東急直通線)が開通します。都市の利便性と潰えない自然を有した保土ヶ谷区は、新たにこの地に赴く人々を悠々と出迎えることでしょう。私も区民の1人として、未来に向け歩む美しい街づくりの担い手でありたいです。

小松成美 (ノンフィクション作家)

1962年2月25日神奈川県横浜市生まれ。専門学校で広告を学び、1982年毎日広告社へ入社。その後、放送局勤務などを経て、1990年より本格的に執筆を開始する。主題はスポーツ、映画、音楽、芸術、旅、歴史、伝統工芸など多岐にわたる。情熱的な取材と堅い筆致、磨き抜かれた文章にファンも多い。真摯な取材には定評があり、スポーツノンフィクションや人物ルポタージュに新境地を開いた。また講演会やテレビコメンテーターとしても活躍。

〔著作〕

- ・「中田英寿 誇り」(2009年8月/幻冬舎)
- ・「勳三郎、荒ぶる」(2010年2月/幻冬舎)
- ・「若い人におくる龍馬のことば」(2010年6月/筑摩書房)
- ・「人の心をひらく技術」(2010年9月/メディアファクトリー)
- ・「和を継ぐものたち」(2010年10月/小学館)
- ・「アストリット・キルヒヘア」(2011年4月/角川グループパブリッシング)
- ・「なぜあの時あきらめなかったのか」(2012年7月/PHP研究所)
- ・「対話力 私はなぜそう問いかけたのか」(2012年9月/筑摩書房)
- ・「横綱白鵬 試験の山を越えてはるかなる頂へ」(2013年9月/学研教育出版)
- ・「仁左衛門恋し」(2014年12月/徳間文庫カレッジ)
- ・「全身女優 私たちの森光子」(2015年5月/KADOKAWA)
- ・「熱狂宣言」(2015年8月/幻冬舎)
- ・「五郎丸日記」(2015年12月/実業之日本社)
- ・「それってキセキ? GREENEENの物語」(2016年5月/KADOKAWA)
- ・「虹色のチヨーク」(2017年5月/幻冬舎)